

# モンテーニュ『エッセー』におけるセネカ主義

——エラスムスとリプシウスのはざままで——

山本佳生

## はじめに

古典古代への憧憬と崇拜、そして自分たちもそこに並び立つのだという野心に取りつかれた初期近代の作家、詩人たちにとって、古典作品をどのように読み、自分たちは何を書くのかは大きな問題だった。一方では作品の校訂<sup>(1)</sup>、注釈<sup>(2)</sup>、気に入った文章や決まり文句の収集、整理を経て、抜粋の集成——いわゆるコモンプレイスブック<sup>(3)</sup>——を作成し、他方では模倣<sup>(4)</sup>や出典を明記するせざるにかかわらず引用する<sup>(5)</sup>、あるいは引用文だけで論考を作り上げる<sup>(6)</sup>など、読むことと書くことにおける彼らの試行錯誤が見て取れる。

こうした初期近代の作家たちの古典に対する態度を「親密さ intimacy」という視点から Kathy Eden は次のように特徴づける<sup>(7)</sup>。まず読むことにあっては、内容の知識のみならず、著者の感情や思考、さらにはその精神まで読み取ることが求められ、最終的には著者と「親密に」なることが目指される。この考え方は主としてセネカ『倫理書簡集』第84信において論じられる読書と知識の消化——花々のあいだを飛び回り蜜を集め、自分の分泌物と混ざり合わせる蜜蜂のイメージで語られる——や、第33信や第114信で強調される著者の「天性 ingenium」の発見などを発想源として持つだろう。他方で書くことにあっては、各人が固有に持っている天性の発露が目標として掲げられ、著者は自分の性格や感情があらわれるような文章を書くことを追求する。おそらくこうした考え方は「言論は魂の鏡 oratio speculum animi」という理念に裏打ちされているはずだ<sup>(8)</sup>。だがそれよりも重要なのはみずからの精神をあらわす、言い換えれば読者に「親密さ」を示す手段もしくは媒体として「書簡」というジャンルが注目されたことである。

もちろん古代から手紙というのは多く書かれてきたし、キケロや小プリニウス、セネカなどの有名な書簡集がある。だが、伝統的なレトリックの領域——審議、法廷、演説弁論——のなかに書簡というジャンルの場所はない。それが真剣に取り上げられるようになったのはルネサンス期からだと言ってよい。1345年にヴェローナの修道院でペトラルカはキケロのアッティクス宛て書簡集に出会う。これが書簡を文芸ジャンルへ押し上げる契機となった。ペトラルカは最初はキケロを真似て、次にキケロに宛てて、さらにそれと同様の仕方友人たちに宛てて手紙を書く。そのなかで心に浮かんだこと、つまり自発的な考えや感情の動きを——要約したりなにか結論づけ

たりすることなく——ありのままに書くことが、「親密さ」を読む人に感じさせることだと気づく。また、手紙を読むことにおいても、文章のなかに友人の姿を見出すことに喜びを覚え、さらには印刷術の発達にもなって「親密さ」の範囲は古代の作家たちにまで拡張する。ペトラルカによる書簡というジャンルへの着目と実践、「親密さ」の意義の（再）発見が、このジャンルの方向性を決定し、その後の理論的展開と豊かな実践を導いたといえるだろう。

ところで、書簡を構成する諸要素——これらについては後述する——をモンテーニュの『エッセー』は分け持っているという指摘はすでになされてきた<sup>(9)</sup>。つまり『エッセー』の読者はそのなかに彼の姿を見出すことができ、「親密さ」を感じられるというわけだ<sup>(10)</sup>。しかしながら、こうした指摘はモンテーニュが書簡ジャンルに言及している部分に基づいた限定的なものに留まっている。それゆえ我々はまずルネサンス期の主要な書簡セオリーを概観し、それらの特徴のいくつかが『エッセー』にも見られることを改めて確認する。そして『エッセー』は後世、特に十七世紀の人々にはセネカの『倫理書簡集』のように受容されていたという見解をふまえ<sup>(11)</sup>、セネカの文体的、思想的特徴を洗い出し、『エッセー』にそれらの影響がどの程度及んでいるのか検討する。とはいえ、『エッセー』は書簡ではなく、セネカの書簡集の模倣作でもない。この点についてフランドルのユマニストでネオ・ストア主義の哲学者ユストゥス・リプシウスの書簡集と比較しながら、モンテーニュにおけるセネカ主義の限界と『エッセー』の独自性を探っていきたいと思う。

## 1. 初期近代の書簡セオリー

キケロやクインティリアヌスが語る古典レトリックの範疇内では、書簡について体系的に論じられることはない。とはいえ彼らは「会話 *sermo*」と「弁論 *contio*」を区別し<sup>(12)</sup>、前者の延長線上に書簡の存在を認めていた。それゆえ会話と同じような平明さ、簡素さが求められ、技巧や習練は不必要とされた。唯一、前二世紀頃の文法家で弁論家のデメトリオスが『措辞について *Περί Ἐπισημείας*』のなかで真剣に論じているのが確認される（第四巻 223-235 にかけて）。

中世に入ると、特に十一世紀イタリアにおいて王侯貴族に仕える職業的秘書たち——「書記官 *Dictatores*」——が様々な公的文書を作成する際のマニュアルとして *Ars Dictaminis*（あえて訳せば「公式書簡作成術」とでもなるうか）が広まりを見せた<sup>(13)</sup>。これは外交や儀式的書簡の諸部分——挨拶、叙述もしくは好意を得る陳述、要点をまとめる結論部など——に用いられる定型表現の集成であり、散文の指南書でもあった。書記官たちはこうしたマニュアルに則って文章を作成していた。この技術において特に重要視されたのが挨拶文と肩書に付加する文句である。よく言えば壮麗、悪く言えば大仰なそれらの表現はルネサンス期に入っても存続していたようだが、人文主義者たちにとっては決別すべきものに思われたようだ。

イタリアルネサンスの人文主義者たちは、書記官としてこうした伝統と技術を熟知しつつも、

古典作品の再発見に衝撃を受け、書簡作成術を新たな方向性へと導いた。彼らは書簡を不在の友人と自分たちに関係する事柄について語りあうための媒体とみなす、古代の著者たちの定義にしたがいつつ、弁論術の要素を書簡のなかに持ち込んだ。つまりここで中世的 *Ars Dictaminis* の伝統と古代のレトリックが混ざり合ったのだ。この二つの潮流を上手く総合したのが人文主義の王者エラスムスである。

1522年8月、フローベン書店から『手紙の書き方について *Opus de conscribendis epistolis*』が出版される。エラスムスはこの著作を三部に分け、第一部では手紙の定義と決定的な特徴、第二部では即興を身につけるための練習方法、最後に挨拶や定型表現について論じている。

第一部で語られる書簡を定義づける特徴とは「無限の多様性」である。これはどんな主題にも対応できるということの意味する。そして文体的特徴は a) 素っ気なさ b) 怠惰さ c) 高尚な雄弁を避ける d) 日常的な言葉づかい e) 簡潔さの五つである。これらの特徴以上に重視される原則はキケロ、クインティリアヌス由来の「適正（ふさわしさ）*decorum/aptum*」である。主題、場所、時そして宛先に対してふさわしく語ること（*apte dicere*）が求められる。基本的には、書簡は私的なことについて語り、友人に向けて語るものであるというキケロの見解に沿っているといえよう。

ではどのような練習をすればよいか。第二部で示される練習方法とは、主題を選択し、例示をおこなうことである。これは伝統的な弁論のための練習方法と大差がない。実際のところエラスムスは審議、法廷、演説という三つの弁論ジャンルを書簡にも持ち込み、そこに「近親者向けの手紙 *lettres familières*」を付加しただけである。最後の挨拶文や定型表現についても文体の簡潔さや人称の変化など新たな工夫は見られるが、全体として弁論の延長として捉えられている。結局のところ、エラスムスは書簡を一つのジャンルとしてみなすことができていない。むしろ彼が重視するのは、書簡があらゆる主題の多様さに対応し、そこにおいて適正が実現されることにある。このことは当時のキケロ主義論争に関係している。つまりエラスムスにとって、主題と文体が多様であるのと同様、天性もさまざまに異なることが前提であり、それゆえキケロ主義者たちのようにキケロの猿真似をするのではなく、こうした多様さに対応した、適正なものを書くことが目標なのだ。自分の天性にふさわしいものを書く、つまり人格をあらわす文章を書くことが重要視されるようになる（この思想は1528年『キケロ主義者 *Ciceronianus*』において結実することになる）。

まとめると、エラスムスは書簡と古典レトリックにおける弁論を、主題の多様さとそれに対応する文体の柔軟性という点でしか区別することができなかった。全体としては弁論の枠組み、規則などを適用し、中世的 *Ars Dictaminis* の大仰さを排したことで、この作品は書簡にかんする古典レトリックと中世的伝統の総合の成果とみなすことができるだろう<sup>(14)</sup>。この作品から半世紀以上のちになって、リプシウスが、特に文体の「簡潔さ」を強調することで書簡を一つのジャンルとして独立させることに成功したが、ファン・ルイス・ヴィヴェス *Juan Luis Vives* はすでにその重要性に気づいていた。

エラスムスの著作と同名の『手紙の書き方について *De conscribendis epistolis*』は、1536年に出版されたが、そこでヴィヴェスははっきりと書簡についての定義の曖昧さを批判し、挨拶が手紙の特徴とみなされるのであれば、キケロの『善と悪の究極について』や『友情について』、『義務について』などもそれぞれ宛先を持ち、著作の最初に挨拶を述べているのではないかと主張する。書簡が他の論考や弁論と区別されるのはむしろ「簡素さ *simplicitas*」による。手紙には複雑な構成も凝った技巧も不要である。このようにヴィヴェスはリプシウスに先駆けて簡潔さの重要性を強調する。とはいえ、この著作が大きな影響力を持つことはなく、時代はエラスムスの総合的な教科書のような著作を好んだ<sup>(15)</sup>。だが、書簡について論じる際に古代の弁論と中世の伝統と一線を画そうとしている点で意義があったといえるだろう。

文献学者でありながら哲学への野心を垣間見せるリプシウスは、ミュレのように「弁論家 *Orator*」という理想を追求するのではなく、あくまで私人として発信する<sup>(16)</sup>。1586年『書簡選集第一巻 *Epistolarum selectarum centuria prima*』の序文では簡潔な文体の称揚をはじめ。ここでは美文も高尚なテーマも不要であり、即興的かつ自発的な文体が理想とされる。書簡に特有の平俗体 (*sermo humilis*) は書き手の精神と肉体の状態をあらわすのに最適である。「(というのも) 手紙は私自身とともに憔悴したり興奮したり、悩んだり楽しんだり、熱くなったり冷たくなったりするからだ。いうなれば、私の魂と身体の症状がこの絵にあらわれているのだ (*Languent enim illae [=meas litteras], excitantur, dolent, gaudent ; calent, frigent mecum. Vt verbo dicam, affectus animi corporisque mei in hac tabella*)」<sup>(17)</sup>。

1591年の『書簡教程 *Institutio Epistolica*』<sup>(18)</sup>はこの序文を体系化したものだといえる。ここでは書簡の主題は親近感のあるものでなくてはならず、弁論術の発想や配置は不要であるということが主張されている。というのも書簡はまず第一にメッセージを伝えるものであり、話題の選択や配置は二の次だからである。そして書簡と弁論は明確に区別される。この点は決定的である。エラスムスにとって書簡は対話がかかれたものという程度の認識だったが、リプシウスにとって書簡は、不在の友人の精神を前にしての、孤独と沈黙においてなされる思索の象徴である。文体にかんしては、エラスムスもいうように平俗体が適しており、重要な要素は次の五つである。a) 簡潔さ (*brevitas*), b) 明瞭さ (*perspicuitas*), c) 単純さ (*simplicitas*), d) 上品さ (*venustas*), e) モラルにおけるふさわしさ (*decentia*)。ヴィヴェスが簡潔さを強調したように、リプシウスもこれを第一とする。さらに、リプシウスがエラスムスよりも一歩抜きん出ているのは、模倣にかんする言及である。エラスムスが当時のキケロ主義者たちの硬直した模倣に対し、天性と文体の多様性を呈示した一方で、リプシウスはそれをより体系的なものに練り上げた。すぐれた書簡を書くためには次の三つの段階の模倣の訓練が必要である。①キケロ模倣によって正確さと明瞭さを身につける。②学校向きではない作家たち、特にプラウトゥスやテレンティウスの喜劇作家を模倣し、文体の柔軟性を養う。③「大人の」作家たち、サルスティウス、セネカ、タキトゥスといった簡潔さが際立つ作家たちを真似る。リプシウスが呈示する模倣理論の根底にあるのは、エラスムス

のような反キケロ主義ではもはやなく、むしろセネカやタキトゥスといった白銀ラテン期の作家たちへの関心である<sup>(19)</sup>。これに加えて、準備として引用と装飾、表現と語彙を集めておくことが勧められる。装飾に関しても、イメージ、アレゴリー、機知に富んだ表現の数々を記憶しておき、とくに警句は機知や鋭さを与えるので重要である。即興性や自発性を得るため逆説的にも常套句や話題の膨大なストックが不可欠であるということが論じられるなど、非常に教育的かつ実践的な事柄の数々がこの小著のなかで語られる。

エラスムスとリプシウスのあいだにモンテーニュは位置しているといえるだろう。というのも彼は書簡についての理論を述べたわけではないにせよ、この北方ルネサンスを代表する二人と同一の文化、教養の圏内にいるからである。早速、『エッセー』の書簡的要素を見てみよう。

第一巻 39 章（従来のポルドー市立版では 40 章）「キケロについての考察」では、まさしく手紙が話題にされる。モンテーニュも友人たちから手紙が上手いと思われているという。そしてもし誰か相手がいれば積極的にこの形式を採用しただろうと語る。しかし親友ラ・ボエシはもういない。文通するような相手がないのが現実である。文体についていえば「私は生来、おかしみがあってうちとけた文体をもっている (*J'ay naturellement un stile comique et privé*)<sup>(20)</sup>。けれどもこの文体は私だけのもので、公の話には向いていない (*inepte aux negotiations publiques*)。私の言葉遣いはどんな場合にも、あまりにも簡潔で脈絡がなく、切れ切れで特殊である (*trop serré, desordonné, coupé, particulier*)」(I, 39, 256)。またほかのところでも次のように言う。「私が好む話し方は、単純素朴、紙の上でも口頭でも同じ語り方であり (*simple et naïf, tel sur le papier qu'à la bouche*)、豊かで力強く、簡潔で引き締まっているものだ (*succulent et nerveux, court et serré*) (中略) 冗長よりはむしろごつごつしており、気取りからは程遠く、型にとらわれない、切れ切れで、大胆な話し方 (*Plustost difficile qu'ennuieux, esloigné d'affectation : desreglé, descousu et hardy*)。 (中略) 教師や修道士、弁護士のようなのではなくむしろ軍人らしいものである (*non pedantesque, non fratesque, non pleideresque, mais plustost soldtesque*)<sup>(21)</sup>」(I, 25, 178)。ここで語られるのは、簡潔さの重視や会話に近い文体、単純で日常的な言葉遣いなど、まさしく書簡にふさわしい文体である。

さらに、「私は追加はするが訂正はしない (*J'ajouste, mais je ne corrige pas*)」(III, 9, 1008) もしくは、「私は決して最初の思索を第二のもので訂正したりしない (*[...] je ne corrige point mes premiers imaginations par les secondes*)」(II, 37, 796) というような修正や推敲を拒否するモンテーニュは、『キケロ主義者』のなかで「一度書いてしまったものをもう一度読み直すような精神の習練を積んでいない」<sup>(22)</sup>と自己評価を下すエラスムスと、「私は二度書きはしない。かろうじて二度読むだけだ (*bis non scribo, bis vix eas lego*)」と 86 年の『書簡選集』の序文で述べるリプシウスのはざまにいるのが見て取れるだろう<sup>(23)</sup>。

『エッセー』が文体の平明さや即興性などの点でルネサンス期の書簡セオリーと共通する要素を持つことは確認できたが、すでに少し触れたように、この著作はセネカの書簡のような印象を与えていたことも事実である。そうであるなら『倫理書簡集』の特徴と『エッセー』を比較してみるの

もまた妥当だろう。

## 2. モンテーニュにおけるセネカ主義：文体

セネカの書簡を特徴づける要素は大別すると次の三つになる。(i) 簡潔さ、(ii) イメージ、メタファーの使用、(iii) 言葉遊び。これらの例をここで挙げることは避けるが、『倫理書簡集』を一読すればすぐにこうした特徴が目につくだろう<sup>(24)</sup>。では『エッセー』においてこうした特徴は確認できるだろうか。

(i) 簡潔さ<sup>(25)</sup> といっても具体的様相は多岐にわたる。接続詞省略 (asyndète) や対照法 (antithèse)、もしくは警句的表現 (sentence) などが考えられる。試みに第三巻 2 章の有名な冒頭を引用してみよう<sup>(26)</sup>。

Les autres forment l'homme, je le recite : et en represente un particulier bien mal formé : et lequel, si j'avoy à façonner de nouveau, je ferois vrayement bien autre qu'il n'est : meshuy c'est fait. Or les traits de ma peinture ne forvoyent point, quoy qu'ils se changent et diversifient. Le monde n'est qu'une branloire perenne : Toutes choses y branlent sans cesse : la terre, les rochers du Caucase, les pyramides d'Aegypte : et du branle public, et du leur. La constance mesme n'est autre chose qu'un branle plus languissant. Je ne puis asseurer mon object : il va trouble et chancelant, d'une yvresse naturelle. Je le prens en ce point, comme il est, en l'instant que je m'amuse à luy. Je ne peints pas l'estre. Je peints le passage : non un passage d'aage en autre, ou comme dict le peuple, de sept en sept ans, mais de jour en jour, de minute en minute. Il faut accommoder mon histoire à l'heure. Je pourray tantost changer, non de fortune seulement, mais aussi d'intention. C'est un contrerolle de divers et muables accidens, et d'imaginations irresolues et, quand il y eschet, contraires : soit que je sois autre moy-mesme, soit que je saisisse les subjects, par autres circonstances, et considerations. Tant y a que je me contredits bien à l'adventure, mais la verité, comme disoit Demades, je ne la contredy point. Si mon ame pouvoit prendre pied, je ne m'essaierois pas, je me resoudrois : elle est tousjours en apprentissage, et en espreuve. Je propose une vie basse, et sans lustre, c'est tout un. (III, 2, 844-845. 強調、太字は引用者。以下同様)

まず太字にした「:」は明らかに文章を切断しリズムを短くしているのが見て取れる。そして「, et」というつなぎ方もところどころ見られるが、これによって接続詞の後ろの語句にアクセントが置かれ、文末に重み加わることによって一層リズムが切れ切れになっている。さらに下線で強調した部分は接続詞が省略されている部分と対照法が用いられている部分である。すなわち、冒頭から「他の人々」と「私」という内容面における対照を作りつつ、条件文や付加のための「non seulement...mais」、もしくは並置のための「soit que...soit que」など、文章を短文の組み合わせや積み重ねによって構成しようとしているのが見て取れる。特に「Je ne peints pas l'estre. Je peints le passage」などは接続詞省略のうえに「p」の音を繰り返すことによって簡潔さにリズムを与えてい

る。

ほかのところでは (iii) 言葉遊び<sup>(27)</sup> も取り入れた、「*Nous troublons la vie par le soing de la mort, et la mort par le soing de la vie. L'une nous ennuye, l'autre nous effraye.*」(III, 12, 1098) など、対照法を用いつつ、警句的効果もあるのが確認できる。さらには後半の文章の動詞が掛詞 (paronomase) にもなっているのがわかる (下線部分)。同じページでは「死 la mort」について「*Mais il m'est avis, que c'est bien le bout, non pourtant le but de la vie.*」と「終わり le bout」と「目的 le but」の掛詞が指摘できるだろう。

(ii) イメージ、メタファーの使用<sup>(28)</sup> にかんしては、種子や花、衣服のイメージなどが確認されているが、自分の文章と引用の関係についておそらく剣闘か騎馬試合をイメージして語っている箇所がある。

それに私は決してこれらの古代の一流選手たち (*ces vieux champions*) と一騎打ちをしたりはしません。何度も繰り返し、小刻みに軽い攻撃をかけるだけです。頭からぶつかっていったりせず、探りをいれるだけです。それもはじめから企んでいたほどには攻めません。もし彼らと張り合うことができたなら私も立派な人物でしょう。というのも、彼らのもっとも守備の固いところしか攻めていないからです。このために私はある人々が他人の武具 (*des armes d'autrui*) で指の先すら見えないほど身を固めているのを見ました。(I, 25, 152)

古代の一流選手とは古典作家やすぐれた詩人たちのことを指し、彼らと張り合うような文章を書くことではなく、モンテーニュは小手調べとして彼らのすぐれた箇所を引用する。最後の文章は唐突であるが、他の人々が過剰な引用をしている様子を武具で完全防備しているイメージで語っているのがわかるだろう。

また、これらの特徴が複合的にあらわれている箇所が第三巻 12 章に見られる。「*Nostre monde n'est formé qu'à l'ostentation. Les hommes ne s'enflent que de vent : et se manient à bonds, comme les balons.*」(III, 12, 1083. 強調は引用者)「我々の世界はただ見せびらかすためにできている。人間は風だけでふくらんで、風船のように飛び跳ねて動いている」。まず内容面では虚栄心でいっぱいの人間を風船に例えているのがわかる。そして下線を引いたところは一種の掛詞になっていると同時に、風船が跳ねる音を表している。つまりここでは風船のようにふくらんだ人間のイメージに、それが跳ねる音までも付加されているのだ。

このように『エッセー』のあちらこちらで、句読点などを工夫して簡潔さを生み出そうとしていることや、イメージを用いて語ること、音の反復や掛詞といった言葉遊びの意識などが確認でき、警句的言い回しや詩句の引用も多くあることからセネカの書簡のように受け取るのも無理のないことではない。とはいえ、『エッセー』を『倫理書簡集』と同じジャンルのものとして扱うには何かが決定的に足りない。その欠けている要素を探るため、同じくセネカに大きな影響を受けたリプシウスを比較対象にして考察をすすめる。

### 3. モンテーニュにおけるセネカ主義：目的

『倫理書簡集』の随所でセネカは手紙に文通相手のルキリウスの姿が見て取れることを喜ぶ。手紙を読んでいるだけで、まるでその場に一緒にいるように感じられるという<sup>(29)</sup>。このように書簡は書き手の精神を反映するのにふさわしい媒体であるといえよう。リプシウスも同様に86年の『書簡選集』序文で次のように述べる。

Detegimur enim in epistolis, et subiicimur oculis paene nudi. Nosse me, aut alium vis? Epistolas lege, quae depingunt. Ingenii mei, adfectus, iudicii, imo et uitae non uana imago istic. Alibi fucus et simulatio habitat, hic candor, hic ueritas, et non nisi natiuus ille color<sup>(30)</sup>.

手紙のなかに私は自分の姿を見出し、それをほとんど裸の状態で目の前に置きます。私か、もしくは他の人を知りたいですって。手紙を読んでください。そこに描かれていますから。私の性格、情念、判断そして生活、というよりむしろありのままの姿がそこにあります。他のところには虚飾とごまかしがありますが、ここには誠実、真実、そしてまったく自然の肌の色合いがあります。

この『書簡選集』はリプシウスが文通相手と様々なテーマについて語りあった記録としての意義だけでなく、彼自身が一体どのような人間かを知ってもらうための著作でもある。この序文が80年、82年と相次いで出版されたモンテーニュの『エッセー』の「読者に Au Lecteur」に直接的な影響を受けているか確証はないが、「これは誠実な書物である (C'est icy un Livre de bonne foy)。(中略) 私は単純でありのままの、普段通りの、気取りや技巧とは無縁の姿を見てもらいたい。というのは、私が描くのは私自身だからだ (Je veux qu'on m'y voye en ma façon simple, naturelle et ordinaire, sans estude et artifice : car c'est moy que je peins)」と述べるモンテーニュと同じ精神を共有していることは確かだ<sup>(31)</sup>。

しかしながら、リプシウスはその後も『書簡選集』を第五部まで出版しつづけ、さらにはストア哲学についての論考やすぐれたセネカ校訂版を出版するなど文献学と哲学の両方に精通した学者としてその名を残したが、他方のモンテーニュは『エッセー』というどのジャンルにもあてはまらないような曖昧なものを残し、学者でもなく哲学者とも言い難く、作家というには微妙な文学的意欲しか持っていないにもかかわらず、その作品は多くの人間を熱中させている。この差異はどこにあるのか、あるいは文脈に即していえば、モンテーニュにおけるセネカの影響の限界はどこか。リプシウスが「序文」において語っている著作の目的はそれを知る手がかりとなるだろう。

Nam nullas [serias] esse, falso dixerim, quia interdum intercurrunt totae et ex professo tales, philologiae aut philosophae, et salubrium aut docentium praeceptorum. Consulimus, monemus, cauemus, apud iuuentutem



praesertim : quam cura mihi semper ad utilia, non solum ad amoena ducere, et animo ac robore ponere supra uulgum<sup>(32)</sup>.

ここには真面目な内容がまったくない、と言うことはできないでしょう。というのも、時々文学あるいは哲学の、また実り多く、有益な多くの教訓の内容がはっきりと完全な形で入ってくるからです。私はよく考え、助言し、とりわけ若者の前では注意を払います。なぜなら、私はいつも若者たちを有益な方へと導くことに気をかけており、快適さに導くのみならず、精神とその力である意志を一般の人々よりも高めさせているからです。

一読してわかるようにリプシウスの目的とは「若者の教育」である。この著作に集められた書簡を読むことを通じて、若者たちを教え、導きたいと考えているのだ。ちょうど1583年に出版した『恒心論 *De constantia*』に投げかけられた批判に応答する役割もあるが、この著作はストア哲学とキリスト教の両立を目指すリプシウスの、より理解しやすい形式におけるマニフェストでもあるのだ。そして手紙を通じて読むものを「教化」という考えはセネカの『倫理書簡集』に負っている。リプシウスは全体としてセネカの対話篇や書簡を援用しながら精神の平静さを強調したり、ストア哲学がキリスト教徒にもふさわしいものであることを説くが、さらに重要なのは、文通相手と読者を教え導くのみならず、これもまたセネカ同様だが<sup>(33)</sup>——自分自身の変革をも目指していることである。

では一体どのように自分自身を導いてゆくのか。リプシウスの取る方法は自己観察である。みずからの憂鬱症メランコリーと心気症ヒポコンドリーの状態を詳細に観察し考察する。「この病気の最中に、病ではないものを何か生み出しえただろうか。健康なときでさえ、私は精神が活発で熱中していなければ書くことができなかつたではないか。私は自分の作品をまるで詩人たちのように一種の熱狂のうちに書く。だがいまは、時代と病気のせいであって冷えて固まってしまっている<sup>(34)</sup>」。このように自分の状態を描き、自己との一種の対話を展開しながらリプシウスは、病気の快方を目指すのと同時にストア哲学——もちろん主としてセネカ——をいわば治療薬として、みずからをより良い方向へと導いてゆく。

はたしてモンテーニュに若者を教え導いたり、自分自身を描きながらその改良を目指したりするなどといった目的があるだろうか。彼の著作の目的を説明している箇所を引用しよう。

実際、この書物にあるのは私の気質であり思想なのです (mes humeurs et opinions)。私はこれを自分の信じているものとして示し、他人が信じるべきこととして呈示しているわけではありません。ここでは私自身を明らかにすることだけを目指しています (Je ne vise icy qu'à découvrir moy-mesmes)。もしも新しいことを習得すれば、明日はおそらく別のものになるでしょう。私は人から信じられるほどの権威を持ちませんし、持ちたいとも思いません。他人を教えるにはあまりにも教育がないことを知っているからです。(I, 25, 153)

ここからわかるように、モンテーニュに他人を「教化」する目的も意志もない。『エッセー』は読者

を哲学に導いたりするのが目的ではなく、ただ自分自身の姿を見せるため、そしてモンテーニュ自身がそれを見てさらなる自己探求をすすめるためのものなのだ。「ここにあるのは私の学説ではなく研究である。他人のための教訓ではなく、私のためのものだ (Ce n'est pas icy ma doctrine, c'est mon estude : et n'est pas la leçon d'autrui, c'est la mienne)」(II, 6, 396)。この時点でもはや『エッセー』におけるセネカ主義の限界が見えているだろう。それは第一に文通相手の不在であり、第二に読者に読んでもらうことを通じて何か教訓を与えたいという意識の欠如である。さらにいえばモンテーニュは自分と同世代、もしくは上の世代の人物に言及はするが、自分より下の世代や若者たちへについて語ることはほとんどない。

では次に自己観察を通じて変容をもたらそうとする点についてはどうだろうか。セネカやリプシウスと同様にモンテーニュも慢性的な病気に悩まされている。第二巻 37 章ではみずからの結石との折り合いの付け方が語られる。結石の痛み悩まされれば悩まされるほど、死の恐怖が薄れてきたとモンテーニュは述べる。たしかに苦痛が襲ってきて、平常心は一時的にかき乱されるが、そうでないときは普通の状態である。この病気のときと健康なときのバランスを上手く保つことがモンテーニュにとっては重要である。「これまでのところ、私は自分の精神をこのような均衡で保ってきているので、このまま変えずに続けていくことができたら、理性を欠いているために自分で自分のうえに熱や病を作り出して苦しんでいる他の人々よりも良い状態にあることだろうと思う」(II, 37, 800-801)。自分で作り出した病気に苦しむとはまさに心気症のことである。モンテーニュは病気のときと健康体でいるときの差をつけようとはしない。

私の生活様式は病気のときも健康のときも同一であり、同じ寝床、同じ日課、同じ食べ物、同じ飲み物を用いる。体力と食欲に応じて量を調節する以外はなにも付け加えない。私の健康は普段の生活を乱さずに維持している状態のことである。(III, 13, 1127)

病状を記述し、そこから健康なときの行ないをふりかえってみずからの改良を目指すリプシウスとは異なり、モンテーニュが病から得るのは常に同一であることが重要だという気づきである。これはストア派の不動心などではない。外界の出来事が様々に変化しても動揺させられない理性の堅牢さではなく、モンテーニュが求めているのは、どんな状況でもそれに応じながら自分自身を維持する柔軟さである。「私は常に自分の行なうことを私の全体とする。そして全身を一つのかたまりにして進む (Je fay costumierement entier ce que je fay, et marche tout d'une piece)。(中略)私の判断はその誕生以来、常に同一で、同じ傾向、同じ道すじ、同じ力を持っている」(III, 2, 853)。

「私は踊るときには踊り、眠るときには眠る (Quand je dance, je dance : quand je dors, je dors)」(III, 13, 1157) というように状況と自身の性格や力量にあわせて適切に振舞うことを重視するモンテーニュに、もはや「自己変容」など求めても仕方がないことは明白である。セネカやリプシウスにとっては「真理 veritas」という到達すべき目標があり、書簡による教化も対話もそのための

手段であったが<sup>(35)</sup>、モンテーニュはただ自分自身でありつづけることを『エッセー』で実践して見せている。それゆえ、文体的特徴や自分の姿を文章にあらわすという理念を共有しながらも『エッセー』が書簡とみなされないのは、その目的が決定的に異なるからである。

\*\*\*

セネカは『自然研究』の序文において傲慢にも「もしも人間が人間性を超えることがないなら、人間とはなんとくだらない、卑しいものか！」と述べたが、これに対するモンテーニュの感想はいかにも彼らしい。「これはまた立派な言葉であり有益な望みである。だがやはり馬鹿げている」(II, 12, 642)。モンテーニュはかなり多くセネカを引用したり、パラフレーズしたりして利用しているが<sup>(36)</sup>、すべての点でセネカに賛同するわけではない。この姿勢自体が彼が原則とする「常に自分自身である」ことを物語っているだろう。

ここまで我々は初期近代の書簡セオリーを俯瞰し、セネカの『倫理書簡集』の特徴と『エッセー』を比較しつつ、リプシウスとの差異を明確にすることでモンテーニュの独自性を探ってきた。リプシウスにおけるセネカ主義の程度と比べるとやはりモンテーニュのそれは学者でも哲学者でもないものである。だが、この程度の差異こそが、前者をその時代最高の「学者 *savant*」にし、後者を時代を超えて読まれつづける「賢人 *sage*」にしたのだといえるだろう。

## 注

- (1) たとえばエラスムスはキケロ『義務について』やセネカ、ヒエロニムスの全集をはじめとして新約聖書の校訂までおこなっている。またリプシウスもタキトゥスとセネカについて他の追随を許さないような優れた成果を残している。本稿の中心的テーマであるセネカの影響を考えるうえで重要なこの両者のセネカ校訂については次を参照。Jan Papy, « Erasmus' and Lipsius' Editions of Seneca: A "Complementary" Project ? », in *Erasmus of Rotterdam Society Yearbook* (22), Brill, 2002, pp. 10-36.
- (2) ルネサンス期の注釈については次の二つ。Jean Céard, « Les transformations du genre commentaire », in *L'Automne de la Renaissance 1580-1630*, XXII<sup>e</sup> colloque international d'études humanistes, Tours, 2-13 Juillet, 1979, études réunies par Jean Lafond et André Stegmann, Paris, J. Vrin, 1981, pp. 101-113; *id.*, « Les mots et les choses : le commentaire à la Renaissance », in *L'Europe de la Renaissance : Cultures et Civilisations*, mélanges offerts à Marie-Thérèse Jones-Davies, Paris, Jean Touzot, 1988, pp. 25-36.
- (3) コモンプレイスブックの伝統と実践については次の二つ。Ann Moss, *Printed Commonplace-books and the Structuring of Renaissance Thought*, Oxford, Clarendon Press, 1996; Ann Blair, *Too much to know. Managing scholarly information before the Modern Age*, New Haven, Yale University Press, 2010.
- (4) 模倣、特にキケロ模倣にかんしては G. W. Pigman III, « Imitation and the Renaissance Sense of the Past : the Reception of Erasmus' *Ciceronianus* », in *The Journal of Medieval and Renaissance Studies* vol. 9, n. 2,

- Fall 1979, pp. 155-177; *id.*, « Versions of Imitation in the Renaissance », in *Renaissance Quarterly* vol. 33, n. 1, 1980, pp. 1-32. また次も参照。Martin L. McLaughlin, *Literary Imitation in the Italian Renaissance : The Theory and Practice of Literary Imitation in Italy from Dante to Bembo*, Oxford, Clarendon Press, 1995.
- (5) 引用行為全般については Antoine Compagnon, *La Seconde Main ou le Travail de la citation*, Le Seuil, 1979.
- (6) 主に十七世紀初頭に開花した « centon » と呼ばれるジャンルで、リプシウス『政治学』やピエール・シャロン『知恵について』などが含まれる。Jean Lafond, « Le centon et son usage dans la littérature morale et politique », in *L'Automne de la Renaissance 1580-1630*, XXII<sup>e</sup> colloque international d'études humanistes, Tours, 2-13 Juillet, 1979, Paris, J. Vrin, 1981, pp. 117-128; G. H. Tucker, « Justus Lipsius and the Cento Form », in *(Un)Masking the Realities of Power : Justus Lipsius and the Dynamics of Political Writing in Early Modern Europe*, Brill, 2010, pp. 163-192.
- (7) *The Renaissance Rediscovery of Intimacy*, The University of Chicago Press, 2012.
- (8) これについては次を見よ。Wolfgang G. Müller, « Der Brief als Spiegel der Seele : zur Geschichte eines Topos der Epistolartheorie von der Antike bis zu Samuel Richardson », in *Antike und Abendland*, 1980, t. 26 pp. 138-157; Karl A. Neuhausen, « Der Brief als 'Spiegel der Seele' bei Erasmus », in *Wolfenbütteler Renaissance Mitteilungen*, t. X, 1986, pp. 97-110. また、拙論「魂を反映する鏡——モンテーニュ『エッセー』の言語観」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第65輯、2019, pp. 275-288 においても検討した。
- (9) Hugo Friedrich, *Montaigne*, traduit de l'allemand par Robert Rovini, Paris, Gallimard, 1968, pp. 368-373; Michel Magnien, « Un écho de la querelle cicéronienne à la fin du XVI<sup>e</sup> siècle : éloquence et imitation dans les *Essais* », in *Rhétorique de Montaigne*, (éd.) F. Lestringant, Paris, Champion, 1985, pp. 85-99.
- (10) Cf. « Je luy[=quelque honneste homme] ay donné beaucoup de pais gagné : car tout ce que'une longue cognoissance et familiarité, luy pourroit avoir acquis en plusieurs années, il l'a veu en trois jours dans ce registre, et plus seurement et exactement » 「私はどこかの紳士に大きな利益を与えるわけだ。なぜなら長年の親交から何年もかけて得られるすべてを、この人はこの記録のなかに三日間で、そしてより確実かつ正確に見ることができからである」(III, 9, 1026)。『エッセー』の引用は次のエディションから行ない、括弧内は巻、章、頁数をそれぞれあらわしている。*Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, 1 vol., « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2007.
- (11) Jules Brody, « La première réception des *Essais* de Montaigne : Fortunes d'une forme », in *L'Automne de la Renaissance 1580-1630*, (éd.) Jean Lafond, op. cit., p. 26.
- (12) Cicéron, *De Officiis*, I, xxxvii, 132; II, xiv, 48; *Rhetorica ad Herennium*, III, xiii, 23; Quintilien, *Institutio Oratoria*, IX, iv, 19-20.
- (13) Ronald Witt, « Medieval "Ars Dictaminis" and the Beginnings of Humanisme : a New Construction of the Problem », in *Renaissance Quarterly*, vol. 35, n. 1, 1982, pp. 1-35.
- (14) ここまでの記述は主に次のものに基づいている。Jacques Chomarat, *Grammaire et rhétorique chez Érasme*, 2 vols, Paris, Les Belles Lettres, 1981, pp. 1003-1038; Judith Rice-Henderson, « Erasmus on the Art of Letter-Writing », in *Renaissance Eloquence*, ed. J. Murphy, University of California Press, 1983, pp. 331-355; *id.*, « Tradition and Innovation in Erasmus' Epistolary Theory : A Reconsideration », in *Erasmus of Rotterdam Society Yearbook (29)*, Brill, 2009, pp. 23-59.
- (15) ヴィヴェスのこの著作については J. Rice-Henderson, « Defining the Genre of the Letter. Juan Luis Vives' »

- De Conscribendis Epistolis* », in *Renaissance and Reformation*, New Series, Vol. 7, 1983, pp. 89-105 を参照のこと。
- (16) リプシウスの書簡セオリーにかんする以下の記述は次のものに負っている。E. Catherine Dunn, « Lipsius and the Art of Letter-Writing », in *Studies in the Renaissance*, vol. 3, 1956, pp. 145-156; Marc Fumaroli, « Genèse de l'épistolographie classique : rhétorique humaniste de la lettre, de Pétrarque à Juste Lipse », in *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, nov.-déc., 1978, n. 6, pp. 886-905; *id.*, *L'âge de l'éloquence*, Genève, Droz, 2009 (3<sup>e</sup> éd.) [1<sup>ère</sup> éd., 1980], pp. 152-158. またリプシウス全体にかんしては Ch. Mouchel, « Les rhétorique post-tidentines (1570-1600) : la fabrique d'une société chrétienne », in *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne 1450-1950*, sous la dir. M. Fumaroli, Paris, Presses Universitaires de France, 1999, pp. 467-477.
- (17) *Epistolarum selectarum centuria prima miscellanea*, Leiden, C. Plantin, 1586, « Lectorem meum ». Christian Mouchel, *Cicéron et Sénèque dans la rhétorique de la Renaissance*, Marburg, Hitzeroth, 1990, p. 182; p. 426, note 193 を参照。またこの序文と『エッセー』の「読者に」の類似については Michel Magnien, « Montaigne et Juste Lipse : une double méprise ? », in *Juste Lipse (1547-1606) en son temps, actes du colloque de Strasbourg, 1994*, réunis par Ch. Mouchel, Paris, Honoré Champion, 1996, p. 443 の指摘がある。さらに同著者の « Juste Lipse et Pierre de Brach : regards croisés sur Montaigne », in *Montaigne et Henri IV (1595-1995), Actes du colloque international, Bordeaux (Musée d'Aquitaine) 12 mai 1995, Pau (Château de Pau) 13 mai 1995*, textes réunis par Claude-Gilbert Dubois, Pau, J&D édition, 1996, pp. 125-149 や « *Aut Sapiens, aut peregrinator. Montaigne vs. Justus Lipsius* », in *The World of Justus Lipsius : A contribution towards his intellectual biography. Proceedings of a colloquium held under the auspices of the Belgian Historical Institute in Rome, Rome, 22-24 May, 1997*, ed. Marc Laureys et al., Bulletin van het Historisch Instituut te Rome 68, Brussels-Rome, Brepols, 1998, pp. 209-232 も参照した。リプシウスからモンテーニュに宛てた現存する三通の手紙についても M. Magnien, « Trois Lettres de Lipse à Montaigne (1587 [?] – 1589) », in *Montaigne Studies*, vol. XVI, 2004, pp. 103-111 参照のこと。
- (18) この著作は羅英対訳本が出ている。*Principles of Letter-Writing: A Bilingual Text of "Justi Lipsi Epistolica Institutio"*, ed. and trans. by Robert V. Young and M. Thomas Hester, Carbondale-Edwardsville, Southern Illinois University Press, 1996.
- (19) この『書簡教程』に多くの論者がリプシウスの新たな美学の表明として特権的な位置を与えているが (たとえば Morris Croll, *Style, Rhetoric and Rhythm*, ed. J. Max Patrick et al., Princeton University Press, 1966 や George Williamson, *The Senecan Amble. Prose Form from Bacon to Collier*, The University of Chicago Press, 1951 など) C. Mouchel はこの論考はリプシウスの教義の過渡期のものであり、セネカやタキトゥスよりもプラウトゥスの影響が多くみられると指摘している (C. Mouchel, *op. cit.*, p. 433, note 236)。実際タキトゥスを多く引用した『政治学六巻 *Politicorum libri sex*』は 1589 年の作品であり、セネカないしストア哲学についての著作は 1600 年代のものであるから、Mouchel の指摘は正当である。
- (20) この二つの形容詞を含む文は「ポルドー市立版」の区分にしたがえば、(b) の 1588 年版のテキストであるが、M. Magnien はこの部分の背後にはリプシウスの 86 年の『書簡選集』序文があると示唆している (« Montaigne et Juste Lipse... », *art. cit.*, p. 448)。だが、K. Eden, *op. cit.*, p. 102 (note 11 も参照のこと) はこの二つの形容詞がキケロ『近親者宛て書簡集』のなかの Curio に宛てた手紙 (*Ad fam.* 2. 4. 1) のなかで用いられている « familiare et iocosum » を想起させると指摘している。
- (21) この形容詞の並び方はエラスムスがキケロ主義論争の最中の 1527 年にギリシャ語学者の Francis

- Vergala 宛てに出した手紙のなかで挙げられている理想の文体のそれと、非常に類似している。*Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, ed., P. S. Allen, H. M. Allen and H. W. Garrod, Oxford, 1906-1956, (Allen), VII, n° 1885, p. 194, «[...] malim aliquod dicendi genus solidius, astrictius, nervosius, minus comptum magisque masculum». Cf. H. Friedrich, *op. cit.*, p. 421, n. 323.
- (22) *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, Amsterdam, 1969-, I-2, p. 681, «[...] nec unquam potest imperare animo suo, ut uel semel relegat quod scripsit [...]». また前注 (*supra*, note 20) で触れた Vergala 宛書簡にも「いまは書いたものに磨きをかける暇もなければ、それを読み直すことさえできません (Nunc adeo non vacat expolire quod scribo ut crebro nec relegere liceat)」という表現が見られることについて Jules Brody, *art. cit.*, p. 29, note 18 は指摘している。
- (23) M. Magnien, « Montaigne et Juste Lipse... », *art. cit.*, p. 446, note 2.
- (24) *Select Letters of Seneca*, ed. Walter C. Summers, London, Macmillan Education St Martin's Press, 1910, « Introduction. III », pp. lxx-xcv に詳細な分析があり、それを参考にした。
- (25) こうした特徴についての研究は多くあるが主要なのは次のもの。A. Compagnon, « La brièveté de Montaigne », in *Les formes brèves de la prose et le discours discontinu (XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècles)*, *op. cit.*, pp. 9-25; Nathalie Dauvois, *Prose et poésie dans les Essais de Montaigne*, Paris, H. Champion, 1997, pp. 87-122; René Fromilhague, « Montaigne et la nouvelle rhétorique », in *Critique et création littéraires en France au XVII<sup>e</sup> siècle*, Colloque international, Paris, C.N.R.S., 1977, pp. 55-67; J. Lecoine, « L'organisation périodique du 'style coupé' dans le livre III des *Essais* », in *Styles, Genres, Auteurs*, Press Universitaire de la France, n°. 2, 2002, pp. 9-24.
- (26) André Tournon, « L'énergie du "langage coupé" et la censure éditoriale », in *Montaigne et la rhétorique*, éd. J. O'Brien, Paris, Honoré Champion, 1995, pp. 128-129 において「ボルドー本 Exemplaire de Bordeaux」への書き込みを詳細に検討している。
- (27) 特に掛詞 (paronomase) については、M. Magnien, « "Tel [...] fait des Essais qui ne sauroit faire des effaits" : la paronomase dans *Les Essais* », in *Montaigne Studies*, vol. XXVII, 2015, pp. 113-126.
- (28) この方面にかんしては Carol Clark, « Seneca's Letters to Lucilius as a Source of Some of Montaigne's Imagery », in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, tome XXX, 1968, pp. 249-266; *id.*, *The Web of Metaphor. Studies in the Imagery of Montaigne's Essais*, French Forum Monographs 7, Lexington, 1978. また拙論において種子、花や衣服のイメージとレトリックの関係について考察した。「[豊饒さ]についての一考察——『エセー』におけるイメージの使用——」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 66 輯、2020 (2021 年 3 月刊行予定)。
- (29) Sénèque, *Lettres à Lucilius*, 40-1; 67-2; 75-1; 75-4.
- (30) *Centuria miscellanea*, *loc. cit.* Cf. C. Mouchel, *op. cit.*, p. 182; p. 426, note 195; J. Jehasse, *La Renaissance de la critique : l'essor de l'Humanisme érudit de 1560 à 1614*, Saint-Étienne, Publication de l'Université de Saint-Étienne, 1976, p. 270. なお謙譲のための一人称複数形は一人称単数形で訳してある。以下同様。
- (31) Cf. M. Magnien, « Montaigne et Juste Lipse... », *art. cit.*, pp. 441-443.
- (32) *Ibid.* Cf. C. Mouchel, *op. cit.*, p. 191; p. 432, note 230; J. Jehasse, *loc. cit.* ここからリプシウスの「自己変容 autotransfiguration」までの議論は次のものに大いに負っている。Jan Papy, « Le sénéquisme dans la correspondance de Juste Lipse : Du *De Constantia* (1583-1584) à la *Epistolarum Selectarum Centuria Prima Miscellanea* (1586) », in *Journal de la Renaissance*, vol. VI, 2008, pp. 49-62.

- (33) Cf. *Lettres à Lucilius*, 6-1, « Intellego, Lucili, non emendari me tantum sed transfigurari. Nec hoc promitto iam aut spero, nihil in me superesse, quod mutandum sit. » 「ルキリウスよ、私が思うにいま私は自分の過ちを正しているばかりでなく、面目を一新してもいるようだ。だがこれによって私のうちに改善すべきことが全く残っていないことを保証もしないし、そのように望みもしない」；83-2, « Observabo me protinus et, quod est utilissimum, diem meum recognoscam. Hoc nos pessimos facit, quod nemo vitam suam respicit. » 「たえず私自身を観察しよう。そしてこれが最も有益なことだが、私自身の一日を反省しよう。私たちを最も悪しきものにするのは、誰も自分の人生を顧みないことだ」。
- (34) *Centuria miscellanea*, I, 79, Martinius Lydius 宛。C. Mouchel, *op. cit.*, p. 187; p. 429, note 213. « In morbo hoc nisi morbidum quid possim? Et ego me ne sanum quidem ad scribendum scio accedere, nisi cum vegeta mihi mens et arcis. Cum calore quodam nostra illa pangimus, non minus quam poetae. At nunc frigeo et rigeo, anni tempore et morbo ». また病状の観察については C. Mouchel, *op. cit.*, pp. 185-190 の詳細で卓抜した分析も参照のこと。
- (35) Cf. *Lettres à Lucilius*, 66-6, « animus intuens vera, peritus fugiendorum ac petendorum, non ex opinione, sed ex natura pretia rebus inponens, toti se inserens mundo et in omnes eius actus contemplationem suam mittens, cogitationibus actionibusque intentus, [...] quem nulla vis frangat, quem nec adtollant fortuita nec deprimant; talis animus virtus est. » 「真理に目を向ける魂、避けるべきものと求めるべきものを熟知し、世間の評価ではなく自然に基づいて物事の価値を定め置き、全宇宙に入り込んでそのあらゆる活動に、自分の思索を投げかけ、思考と行動に注意を払い、(中略) いかなる力にも挫かれず、偶然のものに高揚もしなければ、意気消沈することもない、そのような魂が美徳である」。
- (36) モンテーニュのセネカ利用については次のもの。G. Pire, « De l'influence de Sénèque sur les *Essais* de Montaigne », in *Les études classiques*, vol. 22-3, 1954, pp. 270-286; *id.*, « De l'influence de Sénèque sur les théories pédagogiques de Montaigne », in *Les études classiques*, vol. 22-4, 1954, pp. 378-387; Catherine Magnien-Simonin, « *Essais* I, 22 : Montaigne, lecteur d'un Sénèque français? », in *French Forum*, vol. 13, n. 3, 1988, pp. 277-285.

